
愛しさも、切なさも。

如月らむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しさも、切なさも。

【Nコード】

N6181Y

【作者名】

如月らむ

【あらすじ】

ある夜偶然に出逢ったのは、長年の海外勤務から帰国した男の人の「兄」。気づいた時には既に立っていた禁断のフラグ。誰にも言えないオフィスラブ、決して赦されない愛しくも切ない大人兄妹・極上の禁断 Love Story。他サイト様にて執筆した作品【愛しさシリーズ<運命編> 改訂・完全版】内容・描写にかなり差がありますので、こちらをお読みする事をお勧めします。濃いめの禁忌ベッドsceneを多く含みます。

Introduction (前書き)

章ごとに設けられた、みゆとアキの呼び掛けIntroduction
o n o .

これらはいずれも物語後半のあるトキのものです。
ぜひ、お気に留めながら読み進めてみて下さい。

Introduction

ねえ、アキ 覚えてる？

13年ぶりに偶然再会したのが この場所だったよね

アキも 私も お互いの事全然気づいてなくて

血の繋がりもない「他人」 みたいだったっけ

笑っちゃうよね。

あれから季節は変わりゆくのに

私の心はずっと、ここに。立ち止まったままだよ…。

私たちの運命は やっぱり どうしても 変えられないものだったのかな？

「愛しさ」とは永遠に、「切なさ」を越えられないものなのかな…

ねえ、アキ？

できることなら

もう一度。

それが叶うなら

何度でも。

あなたに、出逢いたい…

”あなたと出逢えたことが運命ならば きっと。

この愛は 永遠になる”

… 出逢え、ますよつに

* * * * *

Introduction (後書き)

現在公開している『愛しさも、切なさも。』とは
内容が異なる箇所があり、新たなエピソードが加わっています。
また性描写においては、より濃いめになる予定です。

#1 運命のイタズラ - ? -

side みゆ

あなたとの出逢いまで、アト…1、2、3歩。ドン
ッ！！

『 あっ、ごめんなさ…！ 』

ここは、新宿のビル街。

残業からようやく解放され、クタクタな足を引き摺り
新宿駅までの道のりをフラフラと歩いてきた時のこと。
これはただの私の不注意？それとも誰かのイタズラだったのかな？
今私は、見知らぬ人の胸の中に真正面から頭を突っ込んでいたりし
ているワケで。

けれど早く離れなきゃ、きちんとお辞儀をして謝らなきゃ、と
いくら頭で常識を反芻しても、思うように体が動いてくれない。ク
ラクラす、る

「…また随分と凄いぶつかり方だな、前見てんのかよ…」

そんな 人様に大迷惑をお掛けしている私こと

桜木 さくらぎ みゆ（23歳）は、社会人2年目の言わばOL。
と言っても、勤め先・一流化粧品メーカー<プール・マシエリ>の
経営者はお父さんで

その娘の私は一般的に「社長令嬢」って呼ばれるみたいだけれど。

その大企業の社長令嬢がなぜOLをしているのか…不思議だよ、私もそう思う。

でもこれはお父さんとお母さんの願いでもあるの。

”みゆだけは家柄のシガラミに囚われず、極普通の女性として育てゆきなさい”

”決して傲ることなく 普通の生活を、自由な恋愛を、ごくありふれた幸せを”

「 何やってんだよ いつまでそうしてる気？」

…そうして数秒経たないうちにも

ガクガク震える足、ズルズルと崩れゆく視界、ゆらり遠のく意識

軽く目眩を起こしている私に、彼の苛立ちを気遣っている余裕なんて勿論なく

目に映るものを追いかけるだけで精一杯だった。

…あ、洗い立ての匂い香る白いシャツ！良質のスーツ？ネクタイ、ベル、ト

「…あのな、！？……どうした？」

そのまま私は軽い貧血を起こしたらしく、数分気を失っていた様子で

気づけば初めて会った男の人のワイシャツをシワクチャになるほど握り締めていた。

私、ずっとこの人に体を支えられてたの？

スーツの上を見上げてみれば

力強そうな腕、懐かしさに似た暖かさを感じる胸板、定間隔で響く「おい」の呼低音

この抑揚のない響きに焦ってサツと見上げた先には、薄暗闇に光る…切れ長の瞳

私を下に下に見下ろすその瞳は、温かみの欠片なく鋭く尖っていてその瞳を引き立てるのはシャープな顎と、スツと通った鼻筋キリリと勇ましい眉毛

そのパーフェクトな美形顔に胸の鼓動がドクンと一打ちした時心までもが驚掴みにされてしまう。

ねえ、一目惚れって、信じる？

他人に、一瞬で恋に堕ちれると、思う…？

その人を見ているだけで、呪文にでもかけられたみたいに体は固まってる。

それでも体の芯から訴えかける鼓動はずっと加速し続けていて。

思わず手を当てた胸の鼓動が彼に届きそうな位…心が大きく、大きく揺れ動く。

「気分が悪いなら医者にも診てもらおうといい。俺は御免だ」

なのに、トキメキ初体験も虚しく

彼は気だるそうに目線を外し、不機嫌な顔つきでギリツと睨みつけるの。

背筋も凍るその冷たい声で。素っ気ない言葉を春風に散らして。

だから体の弱ってる私に返事をする暇も与えず

何事もなかったようにクルリと背を向けて歩き出す彼に

然、呆然。

唾

え、ちよつと、感じ悪くない？

私だつて迷惑かけて悪かつたとは思つてるけど、でも！
もうちよつと人的な何かがあつてもよかつたと思う！！
ちよ、ちよつと男前だからつて気取つちやつて。

久しぶりのイケメンに奪われたこのドキドキどうしてくれるの？
貴重な乙女心、返して欲しいっ。

ねえ、返してよ…。

細めの体つきにスラーツと伸びた背丈

少し耳にかかる位のサラサラしていそうな漆黒の髪

彼が 遠のいていく…。

何も語らない背中自信に満ち溢れた姿勢

後ろ姿にさえ心を奪われるなんて私、どうかしちゃってる。

もしも彼が心優しい人だったら

ここから恋が生まれてもおかしくないハプニングだったのに
蓋を開けてみればただの冷血様。

なんて夢みたいなきことを思い巡らせていると

何かを思い立つたように急に振り返る彼。

私を、見て、る…？

またあの突き放した口調で何か言われるのかな？それはそれで、怖
いっ…。

そう私がオドオドとしている合間にも

コツコツと靴の音を鳴らして一直線に私へと歩み寄る彼の音
その歩み寄る一歩一歩にどうしようもなく鼓動を乱されて
高鳴る胸に手をグツと強く押し付けた。

だってそうでもしないと、この心臓ごと 心ごと。
思わず、恋を。してしまいそうになるから。

息のかかる距離に来ていた彼ら放たれた、目が眩む程の鋭い視線
その無言の威圧感にさえグラグラと心が揺さぶられていく。

「背中に視線感じたんだけど？ 何？」

『お詫びと、お礼……を……』

私の目の前を通り過ぎていく彼の遅しく綺麗な指先が
迷うことなく長く伸びた私の一束の髪を持っていくことで、言葉ま
で奪われる。

「少し触れただけで期待して 本当分かりやすい女だな……」

お願い そんな風に見つめないで？冷たくしておいてそんなに優し
く触れないで。

私の全てを、持っていないで……。

そう私が身動きの取れないことをいいことに、腰を少し屈めた彼は
最後に…悪戯に。ただほくそ笑んだ。

「 欲しいならくれてやるよ」

掴まれた髪の毛を軽く引つ張られると

その先に待っていたのは、肌と肌で感じるあなたの……温もり。

それは、突然のこと。

これは、偶然のこと。

「偶然」と言う名の「必然」に変わる時。

私の唇は今さつき会ったばかりの男の人の温かな唇に
れていた

包ま

「他人」として初めて出逢った、あなたの唇に

ねえ、今の。何のキス？

フワツと離れた彼の唇を思わず目で追ってしまっ

挨拶代わりって言うてもいい位さり気なくて

それでいて熱い何かを刻み込まれる、この感覚…

突然のハプニングでキスをしてしまった恥ずかしさに煽られ続ける

…胸の鼓動

この状況を把握しきれないのに、戸惑いと欲望がみるみるうちに
膨らんでいく。

瞳がぶつかり合うだけで羞恥心を丸裸にされて

それでも更なる甘い香りを感じ取って反らせない視線。

私の心をまるごとさらってしまうズルい眼差し。

でも唇まで奪うなんて、反則…。もっともっと。欲しくなる

「そんな瞳で俺を見つめてんな」

そんな、目？

考えてる暇も与えてくれない彼にグイツと強く顎を引き寄せられて
今度は唇にカブリつくように力強く、欲望のままに。奪われる

「もつと奥まで欲しいんだろ？」

浮いた唇から漏れ彼の強気な吐息、煽られる　甘い願望

『…んっあ、ちよ、んう　っ』

「…えろい顔……」

2人の唇が潤って、私の心の中を覗き見るように奥深くまで入って
きて

直接脳を刺激されるから頭の中をカラッポにさせられる。

きつとこの人　キス、すごく巧いんだ…

こんなに夢中にさせるキスをするなんてほんと、反則だよ　。

強引に奪っておきながらも、頬を包むのは優しい彼の手
壊れる程胸打つ鼓動をもみ消す吐息に紛れた私の甘い鳴き声
ビル街のど真ん中で何度も何度も重ね合う唇

私は、熱く。深く。あなたに、奪われる

「……お前、隙だらけだな。よく痴漢に遭うタイプだろ…気を付け
ろよ?」

『えっ　あの…!?!?』

「どうせ此処の社員だろ?…運が良ければまた相手してやるよ」

けれどそのヒトトキは、夢のように儂くて

彼は傲慢さたつぷりの一言を残し、何もなかった素振りで立ち去っていく。

せめて名前と携帯番号位聞くべきだったんだろうけど
現実かも分からないフワフワした気持ちでお腹一杯でそんな余裕は
全く無くて

初めて暴かれた甘い欲望を抱えたまま、私は暫くその場所から動け
ずにいた。

全ては、ここから始まったの

ほんの僅かな出来事、衝撃の走る出会い
イタズラな運命が落としていったもの。それは
フラグ。 禁断の

次の日、迎えたいつもの朝

ベッドから起き上がって支度を済ませダイニングチェアに腰を下ろ
すと
テーブルの上にはいつもの様に、和の朝食が用意されていたのだけ
れど
食べて欲しそうな紅鮭を食い入るように見つめながら考えてしまう。

昨日は冷静に考えなかったけど

初めて会った人とか？しかも思い切り街中で？キスしまくっちゃった
んだ！

今思うと、ありえないよねえ…

一夜明けてしまうと、あれは夢だったんじゃないかって気もする
それでも、今でも唇がじんじんと訴える…真実味帯びたアツい熱
私もどうかしてただけど、未だにあのキスの意味が理解できずに
いる…。

つき合いましよう！って感じでも無かったし、これからって感じでも
もないよね…

たとえ同じ会社の社員でもウチは自社ビルを持つ程の大企業、もう
会えないだろうし。

でも、「わかりやすい女」ってどうゆう意味だったんだろう？

「みゆ、早く食べなさい！遅刻したらすぐお父さんにばれちゃうわ
よー？」

そんな答えの拾えない疑問を吹き飛ばしたのは、お母さんで。

お父さんが社長を務める会社だからって社会に甘えは通用しないと
よく言い聞かされるの。

ちなみに私の勤める部署は、新しいプロジェクトを任されている企
画開発部

兄妹3人揃って、大学卒業と共にお父さんの会社に入る事なってい
た。

「タカも昇進したし、みゆも社会人として働くまでに立派に成長し
てくれたし

お母さん、一安心よ」

…タカにいは桜木家の長男（31歳）

社長であるお父さんは昔から仕事ばかりだったから

小さな頃から、私にとってはタカにいがお父さん代わり。
長男だけあって次期後継者・今ではもう専務なの。

「アキも向こうで頑張っているのかしらね…」

…そしてアキは桜木家の次男（28歳）

アキとは年が5コも離れてるけど、私が昔ブラコンて呼ばれた程仲
がよかった。

頑張ってる仕事しているのだろうけど、アキ、元気してるのかな

「アキ、ロス支社にいるんだっけ？」

中学卒業と同時に留学してそのまま支社に入社しちゃったもんね

…」

「そうよねえ。たまには帰って来てくれればいいのに…」

アキは留学してから13年間一度も家に帰って来てない、たまーに
メールが来る位。

顔見せに位帰って来ればいいのに 相変わらず冷たいんだ…

そうしてお母さんも私もそれぞれ思いふけていたら…、わ！！？？

「 みゆ！時間！！」

「あつ 行って来ます！！」

昨夜の余韻に浸る間もなく、ひたすら走り駆け抜ける新宿ビル街
滑り込みセーフで何とか辿り着いた、私のオフィス

『絵里花、奈緒、おはよー！』

近年新設された職場、企画開発部には私と同期の女の子が2人いて

流行り物が好きでまさに合コン受けしそうな

可愛らしい木村きむら 絵里花えりか。

絵里花よく色々な部の人達との合コン話を持って来るから

社内では「合コンの女王」とも呼ばれている。

「ねえみゆ〜今度広報部と飲む約束したからあ〜奈緒と3人で行こうねえ」

そして絵里花の甘ったるいブリッコ口調に乗った誘いを

向かいのデスクからスパッと断ったのが

高級ブランド物好き、まさにおじさま受けしそうなお姉キャラの岩いわ

崎奈緒さきなほ

「絵里花の人脈網ってどこまで広いのよ？」

私は若いのに（男）パスだから。あーみゆは行くってよ??？」

「奈緒！私まだ行くなんて…」

絵里花の用意してくれる合コンはいつも良い人揃い。

入社以来彼氏のできない私にはとても嬉しいお誘いなんだけど

「わあ〜いい！今回も頑張ろうっ！みゆってキレーなのに男っ気ゼロなんだもん。」

そのJK並の恋愛思考、変えた方がいいと思うなあ〜」

相変わらずその可愛いブリッコ口調でズケズケ心に釘を刺すものだから

毎回快くお返事ができずにいたりする。

でも絵里花の言うとおり…

付き合った人がいてもいつも本当にこの人の事が好きなのかな？つて考えちゃって

結局すぐ別れちゃうんだよね…

過去のトラウマってなかなか消えてくれない　本気になるのが、怖い。

…その時なぜかフと思い浮かんだのは、昨日の彼。

もしまた会える距離にいたら、トラウマも吹き飛ぶ位好きになれるのかな？

彼のあの私を見る目も、キスも　思い出すだけで体が熱くなる…

あんな風に瞬間的に男の人に惹かれた事は初めてだったからいつも自分の気持ちに自信が持てなかったから…。

その点、絵里花は恋愛に素直な性格をしていた。

惚れっばい上に好きになると真っ直ぐで、あつと言う間にのめり込んでゆく…

その怖いもの知らずな所がちよっぴり、羨ましい。

ちなみに、奈緒も彼氏がいるみたいだけど

奈緒はあまり自分の事を私達に話してくれない。何か深いワケでもあるのかも…。

そんな、雰囲気も性格も全く違う3人だけど

私たちは入社した時から休みの日も遊びに行くような仲の良い友達だった。

そして、雑談に終止符を打ちに訪れたのは就業時間。

今日は、私が入社して丁度1年が経った日で

この企画開発部に人事部の人が入ってきては、新人社員の紹介をしている。

「さあ来なさい。えー今日から開発部に配属された沢田さわだ 亮介君りょうすけだ」

…へーえ。格好いい顔しちゃってるわー。となると…絵里花を見ると案の定

「木村絵里花でえす！ジャニーズ系だよね沢田くんてえ 彼女とかいないのお？」

やっぱりー！席に座った沢田くんは早速絵里花が絡み着いていた。

「今いないっスねー」

「ええ？。もつたいないい！かつこいいのにい」

そこですかさず奈緒が絵里花にツッコミを入れ

「いい男見るとすぐそうやって興味津々にがつつくのやめなさいよ、見つとも無い…」

けれど絵里花は動じずに、自慢げに言い放ってみせる。

「だってえ、いつどこに彼氏候補が転がってるか分からないじゃあ
ん。

積極的にいかないと損ソン」

だからその前向きすぎる絵里花に奈緒と私が呆れた顔をしていると少し照れながらも、沢田君がキラキラした目でこんなことを言うから

「俺は、その人以外見えない位の完全燃焼できる相手が欲しいんスよね」

急に何を言い出すの　と思いつつも、かつこいい　と私達3人とも一瞬そんなクサイセリフを堂々と言う沢田君に魅せられてしまった。

時だった。

「…え、もう一人、紹介します」

え？まだいたの新人社員　てゆうかまだいたの人事部の人　そうしてみんながどよめく中、人事部の人は気分よく話し始める。

「この1年、開発部の主任は不在としていましたが　海外勤務を終えられて本日付けで正式に就任されました」

主任がそろそろ来るとは聞いてたけど、私達の直属の上司かぁ。　どんな人なのかな？

「失礼します。」

そう期待を胸にドアに向ける視線　そして入ってきた背の高い男の人の姿に、一瞬で目が釘付けにされる。

え ……うそ

新主任として紹介されて現れたのは
昨日、街中で熱烈なキスをしたあの彼。

覚えてる 何にも動じないあの瞳
キスをしている時でさえ乱されない自信に満ちたあの姿勢

2度でも偶然が重なれば、運命って呼べるのかな？
妄想に更け出したら、もう人事部の人の話も耳に入らない。

「この方は、暫く海外勤務されていて」

昨日は暗くてハッキリとは見えなかったってゆうのもあるけど
こう見ると こんなにキレイな顔した人だったんだ
なんて私がポーツと彼を見つめていると

「ちよかつこいいい！あの人お」

イケメンアンテナだけは鋭い！

またもや絵里花がささず強力ながつつきを見せるものだから
あの人だけはヤメてーっ！！

そう心の中で叫びながらまた彼を見ると、視線が出会う…

なのに彼は私の姿に驚いた様子もなく顔色一つ変えずに平然と私を
見ている

ジッと あの切れ長の目で私の目を射抜くかの様に…。

昨日の今日で私を覚えてないってことは無いと思うけど

何でそんな冷静な瞳でいれるの…それが余計私の心をざわめかせて
いった。

それもすぐに、違うざわめきに変わるのに

「 という訳で今日から主任の桜木 アキ君だ。宜しく頼むよ」

『 …ま、って…桜木…アキ …？』

「 ”桜木” って、もしかして みゆのお兄さんとか？……………みゆ？
” ”」

呟いた小さな声は震え出し

奈緒の声だって、今の私の耳には届くはずもない。

昨日の人が、アキ …？うそ、でしょう…？

あまりに予想外の事実には私はすぐに状況を飲み込む事ができずに
みるみるうちに視界が狭まっていく

「 …大丈夫？みゆ顔真つ青だよ？」

『 うん ちよつと、驚いただけ…』

奈緒が心配そうに私の顔を覗き込んで顔色を伺うものだから
一応の口を動かしてみても、思考の歯車が巧く噛み合わない。

昨日の彼はアキで 今あそこにいるのもアキで…

私、アキに恋に堕ちそうになったの …？お兄ちゃんの、アキに
…？

そういえば何となく面影が…。

それよりも何よりも お兄ちゃんとキス っ
アキが帰って来た事は嬉しい事のはずなのにものすごく、複雑な気分…。

出会って恋に落ちそうになってキスまでしちゃって運命の再会をして

実は兄でした…‥‥なんて失恋にも程があるよ。

「 と言う事で、桜木 みゆ君。

兄妹でやりづらい事もあるだろうが仕事に励んでくれよ」

『…は、はい！』

ええ、やりづらいですとも…やりづらさマックスだよ。

「 宜しく？」桜木」

さつきと変わらずに私を貫く何も語らないアキのブレない視線
驚く様子もなく毅然と立っているその冷静さ。

その力才は、昨夜の「男」でもなく「兄」でもなく…紛れもなく「上司」

アキは 驚いてないの？それとも、知ってたの…？

私は兄妹と知った今でも胸は締め付けられたまま ドキドキが、
消えないよ。

…それでも。

絶望的な失恋の切なさアキとの関係の気まずさが喉元をカラカラにさせても。

私は喉の奥から一生懸命言葉を発した。

『 よろしく お願いいたします。 ” 主任 ” …… 』

#2 運命のイタズラ - ? -

side アキ

久しぶりの東京だった

辺りを見渡せば箱詰めになれた景色、都会独特の薄汚れた空気
それは、中学卒業以来ずっとロサンゼルスで生活して来た俺に少々
息苦しいが

それと同時に暖かさに包まれる懐かしさもあった。

あれから13年間日本に帰って来ていないんだ
故郷が恋しくなるのも必然だろう。

無論、その間も家族の事は気になっていたが
時々兄貴がくれるメールを読むと皆元気そう
俺がいなくても父さんや兄貴に任せておけば大丈夫だ、と思っ
た。

そもそも、長期留学やロス支社の入社を望んだのは俺自信だ
後悔はしていない。

そうして、ロスでの仕事も終え、

明日から新宿本社の企画開発部・主任として赴任する事になった。

ようやく日本で働ける、ロスでの経験を存分に活かす事が出来る
そう 俺はビジネスの為に帰国したんだ。

その仕事の打ち合わせも含め
今日はこれから兄貴と食事をする事になっているが
その前に新宿の本社ビルを先に見ておこうと少し寄り道をしていた。

『東京の夜はまだ少し冷えるな…』

等と、高層ビルと共に相当振りの東京をしみじみと肌で感じていた時
歳の割に男慣れしていなそうな綺麗な顔立ちをした女と接触するが…

これを一目惚れと、呼ぶのなら。

「偶然」が「運命」をもたらしたとしか思えない。

俺を見つめる真っ直ぐな瞳に。

戸惑いながらも反らされない微睡みの揺れる瞳に。

何故か懐かしさを超えた愛おしさを感じ、気づけば彼女の唇を奪っ
ていた。

一度唇を合わせると

物欲しげな少女から女の顔に変わっていくサマに悉く欲情が煽られ
その漲る欲望を打ち消す様に 何度も、何度も。キスをした。

いつの間にか、彼女を…離せなくなっていた

今まで女に不自由した事は無い

俺にとって女は居ても居なくても、どうでもいい存在だった。

寧ろ面倒だけで女に情や執着心を持つ等あり得ないと、そう思っ
ていた。

なのに、何故なんだ…

運命だからか？罪の扉を叩いたからか？彼女は俺の心を一瞬でかき乱す

ただの一夜の出来事、そんなの今まで沢山あったじゃないか
俺はどうかしていたのだろうと、別れた後いくらそう自分に言い聞かせても

この唇に彼女の温もりが残って 仕方なかったんだ。

帰国したばかりの俺には連絡手段がまだ無かったばかりに
もう二度と会えないだろうと思っていたが…こんな運命ってあるんだな

みゆ。

やがて 彼女の事が頭から離れないまま
少し送れて到着した、兄貴との待ち合わせの小料理屋

「よお〜久し振りだな、アキ」

相変わらず軽い口調の兄貴も俺も

13年となるとさすがに歳をとったなと感じた。

「母さんには連絡したのかあ？」

『いや、今夜は遅くなると思ってホテルに部屋取ったんだ。

実家には明日行くつもりだ』

… 男兄弟なんてこんなもんだ。

13年も離れてたとは言え、ビジネスと家族の事以外話題が無い。

「みゆもいい女になったぞー？お前明日からの配属開発部だったよなあ？」

みゆも去年からそこにいんだよ」

『妹と一緒に職場か…みゆも変わったんだろっな』

俺の知ってるみゆは小学生までだもんな』

その他に兄貴と話した事と言えば、兄貴が結婚した事や俺の女の話

「アキお前、今女いねえの？あつちに置いて来たんか？」

『…どの女も続かなくてね。女も恋愛も俺には必要無いよ』

「相変わらずだな お前。」

言い寄ってくる女は昔から腐る程いたのにも興味無い顔してたしなあ。

本気になれる相手が出来れば、アキも変わるんだろっがな」

「本気」か…。

女に冷めた情しか向けられない俺には、一生無縁の話だろうとそう、確信じみた自信に満ち溢れていた…この時は。

『…兄貴は今の奥さんがそうだったのか？』

「まーな……」

しかし、兄貴にも煮え切らない様子が伺える

兄貴も色々ワケありか

『みゆか…』

けれどそんな事が気にならない程、妹との再開に期待が膨らんでい

た。

あの泣き虫癖は直っただろうか
この歳になっても尚、ブラコンが抜けず俺に執着するのだろうか。
俺が直属の上司になると知ったら みゆ、びっくりすんだろうな…

そんな淡い笑みをも吹き飛ばした…赴任当日。

妹の記憶を辿りながら開発部の扉を開けると
衝撃的な事実が俺を突きつけた。

みゆが…昨日の女　？マジ、かよ

みゆが驚きを隠せない表情を俺に向けている
顔には出ない様気を張っていたが、俺も十分驚いていた。
まさかあんな形で妹と再会してたとは…と。

妹に手を出してたのか、俺は……。

『よろしくお願ひします』

そう気まずそうに言うみゆを見て いや、妹と分かった今でも。
俺の心は限りなく揺さぶられていた。

程なくして 自己紹介を終え、一息つく間もなく案内された主任室は
部下が働くオフィスとガラス窓で区切られた広めの個室。
しかし、人事部の佐藤部長が色々と説明をしてくれていても
俺はみゆの事が気になって仕方がなかった。

まさかみゆがあそこまで女になっていたとは…
妹に欲情して 何やってんだ、俺は…。

俺の辿っていた妹の記憶は、予想を遙か越えた形で目の前に現れる。
俺の中での妹のみゆは、まだ俺が留学する前の小学生のままだった
んだ

いつもあどけない笑顔で寄って来ては

俺や兄貴が遊んでくれるのを期待の目を輝かせて待っていた。

寝る時には本を読んでやらないといつまでもゴネる様な甘えたな妹
だったんだ。

それが あんな女の顔をする様な歳になっただよな
経った年月を考えれば当然の事。

それでも、昨日の「女」のみゆが頭をチラつかせて
離れようとはしてくれない。

昨日の事は忘れて俺は兄として上司として接していくべきなんだから
うが

正直気持ちのやり場に困っていた。

しかし、俺達が血の繋がりを持つ兄妹である以上そう割り切るしかない。

兄妹と言う事実。

それは、生涯ねじ曲げる事の出来無い……”絶対的な関係”

夜、実家に寄ったらなるべく普通に接しよう

何事も無かった様に接すればいい、何も無かった事にすればいい

兄である俺がそう強くないなければ恐らく、兄妹の関係諸共こじれていくだろう。

みゆをこの事で悩ませたくは無い。

それは妹への思いやりか、はたまた己のあらぬ感情を抑える為か。

『お前は、変わったな…みゆ……。』

……主任室と部下の隔たりのガラス窓

何人も社員がいるのにも関わらず、俺にはみゆしか見えていなかった

あのサラサラした腰までの長いストレートの髪も

あの透き通る様な白い肌も 薄紅色の柔らかな唇も

俺にはもう二度と、触れる事は叶わない。

そう思えば思う程みゆを妹として目に映す事が出来なくなる。

” みゆは妹だ ”

唇をかみしめながらそう何度も繰り返し、自分に言い聞かせた。

#3 運命のイタズラ - ? -

side みゆ

新主任の挨拶を終えたオフィス
通常業務に戻る社員たち

その中で私は当然ながら、全く仕事に身が入らなかった。

アキが上司で、お兄ちゃんです…

その頭の中に現実の水玉を落とした数だけ、視線は落ちていく

「みゆう？さつきの新主任てえみゆのお兄さんなのお？」

『うん 2番目の、ね…』

「そおなんだあ！ちよーかつこいいじゃん

専務と言いい新主任と言いい美形兄弟って感じ！歳いくつ？彼女いるのかなあ？」

だから元気一杯の声が突然湧いて出て来ても

絵里花がアキにどれだけの興味を示していたとしても曖昧な対応しかできない。

そんな時 絶好のタイミングで絵里花を連れ出してくれたのが奈緒きつと俯きがちな私の心中を察してくれたんだらうな

奈緒ってね、人並み外れた洞察力を持つてる上にさり気なく気遣い
が出来る人なの

こんな時はしみじみ人間のできのよさを感じる。

それより、どうしよう私…

これからアキとどう接していいか分からない。

帰国したってことは、これからは実家で一緒に暮らすってことになるの？

一緒の職場ってだけでこんなにも同様しているのに
まさかのまさか、四六時中アキと同じ空気を吸うことになるの？

この日は朝の挨拶以来オフィスにアキがいなかったからまだよかったけど

明日から私、やっていけるのかな

そんな事を考えているうちにも時は進み 就業時間を越え
大きな不安を抱えたまま、そろり実家に帰宅しすると
予想通り、お母さんがルンルンで台所から顔を出す。

『ただいまーあ』

「おかえりなさいい、みゆ！待ってたのよお」

だよね、アキが帰って来たこと聞いたんだろうな…

13年振りに息子と再会出来るんだもん、嬉しいに決まってる。

なんて、まるで他人ごとのようにコクコク頷いては

上着を脱ぎながらいつものように居間に行く

夕ご飯が並べられた食卓には、アキが座っていて。

何でっ 何でアキがいるのっ!？

こんなことは簡単に予想出来ていたのに、この胸は過剰反応をする
気まずさとゆづ息苦しさと共に…。

「みゆは会社で会ったらしいじゃない？」

アキ急に帰ってくるんだもの。ほんと嬉しいわぁ」

お母さんが久し振りに見せる満面の笑み
私だってあんな事さえなければお母さんみたいに素直に笑っていられたのに

運命ってほんとう、イタズラ……。

「アキったら見ない内に随分と紳士になっちゃって！
お父さんに似たのかしらね」

……そんな一杯一杯の私に追い打ちをかける絶体絶命のハプニング。

「……あら？お醤油きらしちゃってる！

お母さん買って来るから先に2人で食べてなさい」

「あ、それなら私が……」

嬉しさで足の浮いているお母さんにストップをかけられず
瞬きをしている間にも外へと出て行ってしまってお母さん
ダイニングに残された…アキと、私。

2人の間に漂う空気は、兄妹から限りなく遠のいていた。

耳を打つのは、心拍より遅い時計の秒針音
胸を打つのは、宛先不明な鼓動

昨日キスを交わしてしまった男の人が

当たり前のようにお兄ちゃんとして家にいる

その違和感に動揺してどうしても体が固ってしまう。

「定時で上がったんだろ？今まで何処ほつつき歩いてたんだよ……どうした？座れよ」

程なくして交わる視線 その先は目より唇。

このままじっとしていたらどうにかなってしまいそうで顔から目線をずらしてアキの隣に座ったはいいけれどいくらお兄ちゃん的面影を辿っても

その先は昨日の熱く鋭い眼差しに辿り着く

どうしよう 意識しちゃいけないって思う程心臓がゆうちょうを聞いてくれない。

このままだと意識してる音、アキに聞こえちゃう…

だからとりあえず目の前のお箸に手をつけてみたのになるべく大きな音を立てて握ったのに

「みゆ？」

真横から響く低音が昨日の熱い吐息と重なって動揺が手を震わせる

カシヤン

あ、お箸が…だめ、もう耐えられないっ。

「久し振りのアニキに何、動揺してんだよ」

けれど、動揺丸わかりの私とは裏腹に、隣りから漏れたのは呆れ言葉に薄い笑み

まるで昨日のことを無いものとする冷静すぎるアキの素振り。

アキはどうしてこんなに普通でいられるの!?

昨日の件に触れたくない気持ちは同じだけど、それにしてもスルーしすぎだと思う!

アキは、何とも思っていないのかな…?

そう思えば思う程、意識しすぎていた私と

何事も無かったかのようにアツサリしたアキとの態度の差にだんだん腹が立ってくるよ…

むしろ、こんな事でお兄ちゃんに意識してる自分に泣けてくる。

『…13年ぶりなんだからしょうがないでしょ』

「ばーか。」

そう言っただけアキは、ご飯に目を映しながらも柔らかく笑っていた。

あ　覚えてる　アキのこの微妙な笑み。

常に堅い表情しか見せないアキが、ほんの少し心を軽くしてくれる瞬間

もしかしてアキは兄妹の関係をを大事にしたいから

あえてあの事には触れないのかな?

妹の私を大切にしてくれたから、困らせたくないから、そうしてくれてるの?

うん、昔からそうだった

アキは口数も少ないし極端に素っ気ないけど

目には見えない思いやりが時折顔を出す
だからその、”たまに”の一瞬がとても優しく感じたの。

アキ、変わってない。私の大好きな、お兄ちゃん。

気まずさ混じりの緊張もほぐれ

相当久しぶりにアキとお母さんと囲む食卓

夕方にいが結婚して出て行ってから寂しがっていた 空の椅子に灯る暖かさ

やがて 再会を祝う団欒にピリオドを打ったのが、お母さんのお願いで。

それは一人暮らしを希望しているらしいアキの部屋が決まるまで
実家で一緒に暮らす とゆうものだった。

長期に渡り家を空けていたことに負い目を感じていたのか
アキはそれに快く承諾。

気まずさの薄れた私にも、少しばかりの嬉しさが芽生えていた。

「 母さんもう寝たのか? 」

『 うん、横になってすぐ寝ちゃったみたい。』

アキが帰ってきてきて相当はしゃいでたもんね?

久しぶりに見たな お母さんのあんなに嬉しそうな顔…』

……そうしてお月様が夜空のてっぺんに昇る頃

食事の後片付けをしている私の傍らで

アキは缶ビールを片手にソファでくつろいでいた。

『…私も飲もうかな』

「そうか みゆも酒飲める歳か。信じられないな…」

『もう13年経つんだよ？私だって成長するって。』

「それもそうだな」

だから冷え冷えのビール缶を片手にアキの横に座ってみると言葉少なめなアキが少し笑いながら私の頭をフワツと撫でる。

もう私子供じゃないって、アキ…

『でもビックリしちゃった アキが開発部の主任なんて。』

もつと上の役職に就くんだとばかり思ってたから』

「ああ、主任は本社に慣れる為のほんの腰掛けなんだ。

直に常務辺りに異動になるだろうな…」

『…やっぱり。アキもタカにいと同じ、出世街道まっしぐらだね？』

でも。ずっと会ってなくても不思議と普通に話せるもの。

あんな事もあつたけれど、アキと私は間違いなく兄妹なんだもん家族って、血縁の絆ってこうゆうものなのかも。

『そつだ！タカにいは会つたの？』

「ああ、昨夜会って飯食つたよ」

なんて気が緩み切っていたものだから

無意識に自分から地雷を踏んでしまっていた。

昨夜…って…キスした前？後？…この話の続き、どうしよう！

「…早い時間から飲み過ぎたよ、酔っててあんま覚えてないんだ」

アキ…？

『そ、そっか アキお酒強そうに見えるのにな？』

けれど、何気なく うまい具合に逸れていく話題
アキ 気を回してそう言ってくれたのかな？

そうなんだ…酔ってたって え、まさか昨日のあの時酔ってたの？
ならキスは酔った勢い？…酔ってて単に覚えてないだけとか…？

なあんだ、そうなんだ。

それなら気にすることなんて全く無かったのかもかもしれない。
アキがそう、言うのならば…。

『ねえアキ、今度タカにいとろ人で飲み行こうよ』

「へえ みゆそんな飲めんのか？」

『タカにいに鍛えられてるからお酒には自信があるんだあ』

どれだけ離れてても、兄妹は兄妹なんだよね？

それは生涯覆すことのできない 絆

昨夜のハプニングはそつと胸に閉まって

これからで一杯にしていけばいいんだよね 大人の対応を。

そんな脆い志、すぐに砕け散るのに

そして時の流れに身を任せ アキとの安定した新生活、数
日後の朝

出社するなり絵里花がお花畑を背負って飛んできたと思えば
いきなりの積極的発言にびっくり。

「ねえ、みゆ?! 私いお兄さんにアタックしてもいいかなあ?」
『え! アキにつ?』

そう言えば絵里花ったら
主任挨拶の時からアキに物凄く食いついていたんだっけ。
そう思い出し納得をしているうちにも、2発目の衝撃が胸を叩く

「何かあ 一目惚れしちゃってえ
ってゆうかねえ! 実は主任が来る前の日の夜
会社帰りにすぐそこで主任見かけたんだよねえ」

アキが来る前の日ってあの日? ”すぐそこ” って会社前?
キスした時の…な、なんですと!?

『み、見たって アキを? な、何してたのかな、アキは?』

もしアレを見られていたら そんな動揺から
確実に怪しくドモリながら恐る恐る聞いてみたけれど

「会社の前に立っててねえ! 私は通りすがっただけなんだけどねえ」
『そ、それだけ?』

「それだけけども。何かその時ビビッときちゃったんだよねえ」
「?」

運良くアレは見られていなかったみたいで、ホッと胸を撫で下ろす。だって、兄妹で　なんて世間からしたらたとえキスだけでも

禁忌

「つて、みゆ？聞いてるう？ビビーツとだよ？ビビーツとお」

「んー。私に聞かれてもー」

でも絵里花が本気ならいんじゃないかな？」

「ほんとあ？ほんとにいいの！あたし頑張っちゃうよあ

彼女とかいないよねえ？ねえみゆう〜？」

うん。あのことはたとえ友達であつても絶対に言えない。

そんなことばかり気にしていたから焦るあまり適当なことを言ってしまうって

その直後にちよっぴり後悔が襲う。

あの日のことはもう私の中でも整理がついてるし

アキとの関係も気まずく無くなった。

でも　何だろう…この胸に広がってゆくモヤモヤした気持ち。

飽きっぽい絵里花だからなのかな？

アキを取られたくないって気持ちにもなってる

13年経った今でもブラコンが抜けていないだけ　ならいいけれど

…。

私も気づけない心の水面下で

アキに猛アプローチをかける絵里花の存在が

秘めた想いに拍車をかけていた

「禁断」へと、導く…その。想いに

異様な胸のざわつきが向かわせる アキへの視線

部下と間仕切りをされた主任室

ブラインドのほんの隙間から見える上司の顔

アキ、随分頼もしくなったな

昔は肩幅あんなになかった、私を抱き留める腕も胸板も見違える程に遅しくて

妹の私には一生見れなかったかもしれない男の人の顔があって会っても全っ然気づかなかったもん あ、これ笑えない。

もし兄妹でなかったら。

私は、きつとあなたを

「 みゆさん？この書類確認して欲しいんすけど」

『…あ！うん』

その危ない妄想を止めてくれたのは、新入社員の沢田君で。年下だからなのかな、この体育会系の口調がとても新鮮で彼のスマイルはいつも爽やかで、自然と心を和ませてくれるの。

「あの みゆさんで彼氏、とか！いるんすか？」

『どしたのイキナリ？残念ながないよー？』

オーラはいつもぼかぼか。話しやすくて 会話もよく弾んで

「ホントっスか！俺、実は みゆさんに一目惚…」
『あっ！！ここ間違ってる。一緒に確認しにいこっか』
「はい！お願い、します…」

きつとアキとは、正反対のタイプ。

「ねえ奈緒、沢田っちってさあ

みゆにはーつか仕事の事聞いているよねえ？」

「何よ、絵里花やきもち？」

ありやどー見てもみゆに惚れてますーって感じじゃない？」

ねえアキ。この時からもう全ては始まっていたのかな？

「やあっぱりい？沢田っちはみゆ狙いかあ。

鈍感おとぼけ・みゆは全然気づいてなさそあ〜」

「アンタさ、さつき主任がどうとかみゆに言ってたけど

身の程わきまえなさいよ…」

「ええっ！だつて主任モロタイプなんだもおん！絶対モノにしてみせるよあ」

恋も、友情も、私の知らない所で色々な人の想いが動いていた。

「主任てどこも重要だけど みゆのお兄さんなんだから！

お願いだから、こじれる様な事だけはやめてよね？」

「ええ それは奈緒ぢゃあん！

あたし知ってるんだからあ〜みゆのお兄さ 専務とおコッソリ会
ってるの」

「……………」

この時からみんなの歯車が少しずつズレ始めていたことなんて
今の私はまだ、気づく気配すらなかったの。

#3 運命のイタズラ - ? - (後書き)

早くらぶらぶさせたい ボソツ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6181y/>

愛しさも、切なさも。

2011年11月30日23時54分発行